



晴夜 (6) | 3

柴田 佐知子

譲る気のないくらんこを高く漕ぐ

玄海の紺の全き武者幟

香水や贅のひとつに独り身も

青々と家居の母に露の雨

かたまつて皇居の蔭に著莪の花

天皇の御座所へ向かふ蟻の列

雨の降る星の葉裏に天道虫

夜に入る黒髪山の滴りも

春 雷

遠野 萌

あたたかや鳴るまで揺らす神の鈴

容色のかげりし午後の雛かな

春雷や均して母の白枕

竹箒出はらつてゐる彼岸寺

花屑の上を吹かるる花びらよ

堰越えてまたあらたなる花筏



春泥の足跡ふゆる神の前

鬼門より蝶の現れたる誕生日

増やしたる三面鏡の牡丹かな

学生の赤き靴下修司の忌

晴るる日も泥の色なる鯉五郎

断を下すやうに筍を裂く

数ふればきりなき罪や麦嵐

繋がれし悍馬に青葉月夜かな

結婚を間近に控えた頃から、いつもは口煩い母が口を利かなくなつた。顔を合わせようとしてもしない。母なりの寂しさの表現だと解つたのは私が親になつての事だつた。

その母も九十五歳。入院以来聴かせていたラジカセも二台目。一緒に歌つていた童謡にも反応を示さなくなつて久しい。只いつも満面の笑みを絶やさないでいる。今日もカセットから雨情の詩：母さんにも一度逢いたいな…の歌が。まだ母が側に居てくれる。私の方が母に生かされている気がする。

薔薇の門

青山 悠

大渦小渦海峡に音あつまれり

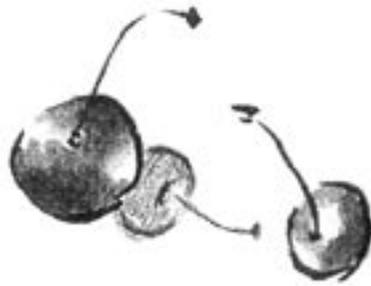
くぐり戸より顔の出てきし朧かな

墓山へ水提げてゆく蝶の昼

法螺貝を子が囲みたる春まつり

鶯やみな濡れてゐる寺の杓

藤の香にまみれて仰ぐ塔五重



萌

勅願寺址のしづけさ椽の花

堰落つる水の千条夏来たる

粽解く父となりたる子を思ひ

虫嫌ひお蚕さまと言はれても

蚕いま眠りに入りし農学部

学生に午後のけだるき薔薇の門

おとなしく巢に収まりし燕の子

夏蓬島人すべて異端の徒

小学校低学年の頃、福岡市に隣接した私のふるさとでは家ごとに蚕を飼っていた。

庭先には嬰粟の花が揺れ、蜜柑の花の香りが村中に漂っていた。薬師堂の杜から青葉木菟の鳴く声が夜毎聞こえて子供ごころにも哀愁を感じたものだ。

生来虫嫌いの私は蚕のあの「ぶよっ」とした感触がぞっとする程怖かった。ある日よく家に遊びに来ていた親戚のお兄さんが、私の膝の上に蚕をのせていたのである。気付いて泣きだした私に高校生のお兄さんは平謝りしたことがあった。嬰粟の花が咲く頃になると戦死したあのお兄さんのことが思い出される。私の虫嫌いは生涯続いていくことだろう。

凝視

秋 千晴

春の雪遊びつつ空降りてきし

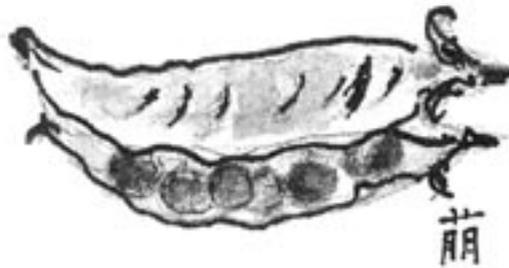
凝視され可愛がられず蝮草

藤の花乳房のやうに持ち上げし

春眠の永眠のごと続きをり

病院の待合室も日脚伸ぶ

一枝に二輪の椿四苦八苦す



乗り越しの絵を見るやうな春景色

白魚の少し太つて茹で上がる

白魚のくの字に真白椀の底

土筆摘む土手に斜めの日が差して

伊予柑の匂ひの残る母の部屋

逃げ水を夢の中まで追ひにけり

黒き土もち上げてをり露の臺

ふらここにスカート揺れもついてきし

田楽をやたら返して夫が居る

今年の桜は殊の外美しく感じました。桜散る頃いつも思い出されるのは私の能の先生の事です。特に新能や夏場の能は、前日より水分を控えて汗をかかないように気をつけておられました。冷房もなく、能衣装に面をつけて謡って舞うのですから暑くて大変だったと思います。

その頃の私は何とも思わなかったのですが、今や先生と同じ歳になって考えると水分不足の血液はドロドロだったのではないのでしょうか。先生を初め、能楽師に心筋梗塞や脳梗塞が多いのはこの為ではないかと、私はペットボトルのお茶を飲みつついつも思うのです。

今ではお茶や水をペットボトルでのラッパ飲みも普通になり、列車やバスの中でも飲めるようになった事が、良いような悪いような何とも複雑な気分です。しかし先生にはもつと長生きして欲しかったと思います。

未 完

あさなが
捷

バス降りてひとかたまりに花遍路

金箔の残る如来や春の雪

日晒しの流木白し浜豌豆

七輪に壺焼の泡あふれたる

接木して祖父の指など思ひ出す

三度目も許されてをり紫木蓮



蜂の巣や不機嫌なるを持って余す

山を誉め風をほめゐる端居かな

入道雲未完の大器とぞ呼ばむ

谷川に足を突込む夏帽子

縞太きものを纏ひし涼みかな

草の花もう母と手をつながぬ子

近道をして迷ひたる冬夕焼

鬼すべの鬼は火のなかより棲めず

見しことは秘して闇夜や雪女郎

私は家族から、変なところにケチだと思われています。たとえば、小包の紐は、ほどこいてつなぎ、廃品回収に出す新聞をくくるのに使います。だんだん減つているとはいえ、こうしている人もまだ多いと思います。紐などは現在、安価ですぐ手に入るし、その時間と手間は人件費として考えると、とても高いものにつくというこのようです。だけど捨てられません。人が包みの紐の結び目とは全然関係ないところにはさみを入れる現場、もしくは、ズタズタに切られた紐を見つけたときなど、どうして、せめて結び目の付近で切らないのかと、悲しくなります。これは、若い人だけとは限りません。ここで私は、ケチと、ものを大切にすることを違うなどと言うつもりなど全くありません。でも私はこれからも、時間をかけて固く結ばれた紐をほどこく生活を続けます。

もしかしてそれがボケ防止にでもなれば、私の人生は結果として、可と思えることでしょうか。大げさ過ぎ？